

I. 運営委員会報告

以下の日程でメール審議を実施した。

1. [R03-001: 意見聴取] 会長・運営委員の任期に関する規程の変更について運営委員の意見を聴取した（審議期間 2021 年 7 月 20 日から 8 月 3 日）。
2. [R03-002: 採決] 2021 年度植生学会各賞の受賞候補者推薦および受賞者決定について審議し、承認された（審議期間 2021 年 9 月 18 日から 9 月 27 日）。
3. [R03-003: 採決] 宮脇昭氏の追悼文について審議し、承認された（審議期間 2021 年 10 月 3 日から 12 日）。
4. [R03-004: 採決] 植生学会若手研究者研究助成制度の改訂について審議し、承認された（審議期間 2021 年 10 月 8 日から 10 月 14 日）。

2021 年 5 月 23 日に運営委員会（オンライン会議）を開催した。審議事項は以下の通り。

1. 2020 年度収支決算（案）について審議し、承認された。
2. 亀井基金の予算執行計画の見直しについて審議し、承認された。
3. 2021 年度収支予算（案）について審議し、承認された。
4. 役員任期の変更に関する検討の進め方について審議し、承認された。
5. 将来検討委員会の設置にあたり川西基博氏を委員長に選任することが審議され、承認された。

2021 年 10 月 3 日に運営委員会（オンライン会議）を開催した。審議事項は以下の通り。

1. 役員任期の変更に関する会員への意見聴取について審議し、承認された。
2. 投稿規定の改定（別掲 1）について審議し、承認された。
3. 執筆要領の改定（別掲 2）について審議し、承認された。
4. 学会記事の掲載を植生学会誌からウェブサイトに変更することが審議され、承認された。

II. 編集委員会報告

2021 年 4 月 6 日に編集委員会（オンライン会議）を開催した。審議事項は以下の通り。

1. 編集委員会の 2021 年度予算について審議した。
2. 植生学会誌の原稿種別見直しについて審議し、投稿規定および執筆要領の改定を行うこととした。
3. 植生情報の編集体制について審議した。

2021 年 6 月 19 日にメール審議により 2021 年度論文賞の受賞候補論文 1 件を選定した。

2021 年 9 月 25 日に編集委員会（オンライン会議）を開催した。審議事項は以下の通り。

1. 投稿規定の改定について審議し、原稿種別の変更を含む改定案を作成した。
2. 執筆要領の改定について審議し、原稿種別ごとの書式の変更や電子ジャーナルの引用方法等を含む改定案を作成した。
3. 「植生学会誌の表記に関する細則」について審議し、修正をおこなった。
4. 植生情報の編集体制について審議し、担当に副委員長を加える申し合わせを作成した。

5. 植生学会誌の刊行費の節減について審議し、体裁の変更や超過ページ料金の見直しを行うこととした。

III. 企画委員会報告

企画委員会（メール会議）を随時開催した。報告事項および審議事項は以下の通り。

1. 2021 年 3 月 9 日、10 日および 8 月 18 日に宮城県職員向けの職場研修を実施した。宮城県東部地方進行事務所の職場研修「沿岸林研修会」では、講師として講演した。また、宮城県林業系職員に向けた研修として、東松島市大曲残存海岸林とその前面の海岸において、植生調査や海浜植物の播種実験などを行った。
2. 宮城県の南三陸町戸食小学校、岩手県の野田村立野田小学校、宮古市立崎山小学校、山田町立船越小学校、釜石市立釜石東中学校、陸前高田市広田小学校において海浜植物再生授業の講師として授業を行った。
3. 若手研究者研究助成制度の応募資格等について会員期間を 1 年から 6 ヶ月に短縮することが審議され、承認された。

IV. 表彰委員会報告

2021 年 4 月 28 日に表彰委員会（オンライン会議）を開催した。報告事項および審議事項は以下の通り。

1. 「2020 年度活動記録」等の資料をもとに、昨年度の活動を振り返った。
2. 第 26 回大会がオンライン開催となったことを受けて、研究発表賞（口頭発表・ポスター）の応募・選考・授与にかかわる活動を新たに加えた。
3. 4 賞（学会賞、奨励賞、功労賞、特別賞）の公募・選考・授与にかかわるスケジュールを検討し、2020 年度に準じて進めることとした。
4. 研究発表賞の応募・選考・授与にかかわるスケジュール・書類が提案され、合意がなされた。
5. 表彰委員会の 2020 年度決算と 2021 年度予算案が提示され、承認された。

2021 年 8 月 20 日に表彰委員会（オンライン会議）を開催した。報告事項および審議事項は以下の通り。

1. 2021 年度学会賞 1 名、奨励賞 2 名、功労賞 2 名、特別賞 1 名の受賞候補者（公募期間 2021 年 5 月 27 日から 8 月 15 日）について審議し、承認された。
2. 第 26 回大会における各賞受賞者の表彰、および学会賞受賞者の講演の進め方について確認し、大会支援委員会の下で実務を進めることとした。
3. 第 26 回大会における研究発表プログラムの作成について、大会支援委員会の下で実務を進めることとした。
4. 第 26 回大会における研究発表賞の選考について、適切な審査体制を構築することとした。
5. 各賞の理念や候補者の公募・選定に関して意見交換を行い、諸規則の微修正や広く公募を得るための方策について具体的に検討した。

V. 群集属性検討委員会報告

2021 年 5 月 10 日に群集属性検討委員会（オンライン会議）を開催した。報告事項は以下の通り。

1. 検討すべき対象と属性の課題を整理した。
2. 今年度の実施計画と役割分担を確認した。
2021年8月9日に群集属性検討委員会（オンライン会議）を開催した。報告事項および審議事項は以下の通り
1. 環境省植生図凡例の情報整理を行い、植生図・平均値メッシュデータ、群集以外の凡例の取り扱い、凡例に載っていない植生単位の取り扱い方について議論した。
2. 帯状、非帯状植生のまとめ方について検討し、群網の考え方などを整理した。
3. 群集和名、命名先取権、上級単位などの統一方法について議論した。
4. 群集属性検討委員会の成果のまとめ方を検討した。
5. 植生学会に計上された経費の使い方を検討した。

VI. 大会支援委員会報告

2021年4月7日に大会支援委員会（オンライン会議）を開催した。報告事項および審議事項は以下の通り。

1. 2021年10月16日にオンライン大会、2021年10月17日にエクスカージョンを開催することで確認した。
2. 大会実行委員会および大会支援委員会の体制について確認した。
3. 大会の開催方法を口頭発表とポスター発表とし、オンラインで開催する方法について議論した。
4. オンラインで口頭発表賞とポスター発表賞を審査できるように、表彰委員会とスケジュールを調整した。
5. 総会・授賞式・受賞講演を2021年10月16日に実施することを確認した。
6. 懇親会についてオンラインで開催する方法を議論した。
7. エクスカージョンを肝属山地と雄川流域で実施することが報告され、実施の可否を決める判断基準について検討した。
8. トレーニングスクールをエクスカージョン翌日に開催することを確認した。

2021年7月27日に大会支援委員会（メール会議）を開催した。報告事項は以下の通り。

1. 大会参加申込が開始される7月末の時点で、東京と沖縄で緊急事態宣言（8月22日まで）が出されており、関東各県と大阪でまん延防止等重点措置が取られている状況で、全国の感染者は増加傾向にあった。このため、鹿児島大会でのエクスカージョンを中止した。
2. エクスカージョン中止と同時に、トレーニングスクールも中止となった。
3. 大会参加申込開始前にエクスカージョン中止を決定したので、会員の参加費を無料とし、非会員は一般4000円、学生2000円とした。

2021年9月23日に大会支援委員会（オンライン会議）を開催した。報告事項および審議事項は以下の通り。

1. 表彰委員会とスケジュールを調整し、大会プログラムを作成した。
2. 口頭発表とポスター発表における発表賞の審査方法について議論した。
3. 次回開催地と方法について検討した。

VII. 将来検討委員会報告

2021年7月27日に将来検討委員会（メール会議）を開催し

た。報告事項は以下の通り。

1. 委員会の主な役割として、将来計画案を検討して提示するまでとすることを確認した。
2. 2013年版将来計画の主な観点を確認し、現状の課題について意見交換をした。
2021年8月10日に将来検討委員会（オンライン会議）を開催した。報告事項は以下の通り。
1. 学会誌や大会の改革案が提案され、その可能性について議論した。
2. 会員の意向や希望を把握するためにアンケートを実施することを検討した。

VIII. 2021年度総会報告

2021年10月16日に2021年度総会（オンライン会議）が開催され、以下の事項が報告された。

A. 報告事項

1. 学会事務局報告

2021年9月29日現在の会員数（正会員477名、団体会員10団体、賛助会員1団体）が報告された。

役員任期の変更について会員への意見聴取を行うことが報告された。

2. 各種委員会報告

上記I～IVの運営委員会、各種委員会の審議事項が報告された。

企画委員会より、研究助成について公募を行うことが報告された。

3. その他

第27回大会の運営代表者として東京農工大学の吉川正人氏より大会についてオンラインで開催する準備を進めることが報告された。筑波大学の上條隆志氏よりエクスカージョンについて八ヶ岳で開催する準備を進めることが報告された。

B. 承認事項

1. 2020年度収支決算（別掲3,4）について
2. 2021年度予算案（別掲5,6）について

IX. 学会賞

2021年度の学会各賞の受賞者は以下の通り。授与式は2021年10月16日にオンライン大会で行われ、上條会長より各受賞者に表彰状と記念品が贈呈された。

学会賞 吉川正人（東京農工大学）

奨励賞 設楽拓人（森林総合研究所 多摩森林科学園）

増井太樹（真庭市役所）

功労賞 石川慎吾（高知大学名誉教授）

野寄玲児（神戸女学院大学）

特別賞 田中徳久（神奈川県立生命の星・地球博物館）

論文賞 矢口瞳・星野義延、武蔵野台地のコナラ二次林における植物機能群による林床管理の影響評価の有効性（植生学会誌第37巻2号69-84頁掲載、2020年12月発行）

研究発表賞

口頭発表賞 金子和広（北海道大・院・農）・富士田裕子（北海道大・FSC・植物園）・横地 穰（北海道大・院・食資源）加藤ゆき恵（釧路市立博物館）・井上 京（北海道大・農）高解像度の数値地形モデ

ル DTM と現地植生判別による根室半島台地上湿原の植生と地形の関係検証

ポスター発表賞 水越かのかん(筑波大・院・生物資源科学)・上條隆志(筑波大・生命環境系)・川上和人(森林総合研究所) 海鳥による種子分散の観点から見た, 小笠原諸島の海鳥巣に含まれる植物種子の種組成

X. 植生学会第 26 回大会報告

植生学会第 26 回大会(実行委員長: 川西 基博)が, 2021 年 10 月 16 日にオンライン大会で開催された. 一般講演では口頭 29 題ポスター 17 題の発表申し込みがあった. 大会参加申し込み数は 154 名であった.

10 月 15 日 発表者・受賞者接続テスト

10 月 16 日 一般講演(口頭発表), 学会賞各賞授与式, 総会, 学会賞受賞者講演

一般講演の申し込みは以下のとおりであった.

〈口頭発表〉

- A01 三宅島 2000 年噴火における植生発達と土壌動物群集の変化 青山友輝(筑波大・生命環境)・上條隆志(筑波大・生命環境)・吉田智弘(農工大・農)・金子信博(福島大・農)・菅原 優(筑波大・生命環境)
- A02 滋賀県伊吹山における「お花畑」の植生分布とその立地条件 立石和奏(京都大学文学研究科地理学専修)
- A03 高解像度の数値地形モデル DTM と現地植生判別による根室半島台地上湿原の植生と地形の関係検証 金子和広(北海道大・院・農)・富士田裕子(北海道大・FSC・植物園)・横地 穰(北海道大・院・食資源)加藤ゆき恵(釧路市立博物館)・井上 京(北海道大・農)
- A04 Vegetation, micro-topography and groundwater table of two small mires in Niseko mountains Yidan WANG (Graduate School of Agriculture, Hokkaido University), Hiroko FUJITA (Botanic Garden, FSC, HU), Minoru YOKOCHI (Graduate School of Global Food Resources, HU), Takashi INOUE (Research Faculty of Agriculture, HU), Kazuhiro KANEKO (Graduate School of Agriculture, HU)
- A05 山地草原におけるシカの採食に対する群集防衛の存在 匂坂光希(東京農工大・院・農)・藤澤高広(東京農工大・農)・大橋春香(森林総研)・星野義延・吉川正人(東京農工大・院・農)
- A06 風倒跡地の若齢二次林におけるつる植物の取りつき状況と樹木の生育への影響について 永末るな・吉川正人(東京農工大・院・農)
- A07 九州山地における絶滅危惧植物キレンゲショウマの生育状況について 前田恵未・西脇亜也(宮崎大・農)
- A08 大出水後のカワラハハコの個体数変動から見る富士川の礫原植生の現状 大庭峻輔・浅見佳世(常葉大学院環境防災研究科)
- A09 弁財天川におけるハマボウ及び干潟の天然記念物指定に向けて 榎本優吾・白松知紀・一木利行・鬼澤陽人・竹村悠太・浅見佳世(常葉大学社会環境学部)
- A10 芦ノ湖の沈水植物群落と水深によるすみわけ: アンカー

ドレッジによる網羅的探索 山ノ内崇志(福島大・共生)・中村誠司(山梨大院・医工農学)・加藤 将(新潟大・教育)

- B01 マクロスケールの種組成比較から見えてきた北東アジアの夏緑広葉樹林の植生地理学的特徴 設楽拓人(東京農工大学)・鈴木伸一(東京農業大学)・中村幸人(東京農業大学)
- B02 東北地方におけるブナ・イヌブナ林の種組成区分と分布 大山弘子(日本ビオトープ管理士会)
- B03 日本の植生史の再考—ブナ林を例として— 原 正利(千葉県立中央博物館)
- B04 北アルプス後立山連峰北部における高山植生の植生地理学的研究 石田祐子(神奈川県立生命の星・地球博物館)・中村幸人(東京農業大学)
- B05 三宅島 2000 年噴火後 20 年間の植生変化 上條 隆志(筑波大学)
- B06 再度山永久植生保存区における 45 年間の植生の変化 橋本佳延(兵庫県立人と自然の博物館)・武田義明(里と水辺研究所)
- B07 2019 年台風 19 号前後での女鳥羽川(長野県松本市)における植生の変化 島野光司・和田凌弥(信州大学理学部)
- B08 昭和初期の小笠原諸島の森林植生: 国有天然林調査報告書原資料の分析から 大橋春香(森林総研)・加藤 仁(日林協)・村尾未奈(日林協)・加藤英寿(都立大)・川上和人(森林総研)・黒川紘子(森林総研)・小黒芳生(森林総研)・新山 馨(森林総研)・松井哲哉(森林総研)・柴田銃江(森林総研)
- B09 岡山県の植生の変遷 森定 伸((株)ウエスコ)・波田善夫(岡山県赤磐市)
- B10 地域植物相研究の進展と植生研究の課題 田中徳久(神奈川県)
- C01 草食動物 3 種による種子の被食散布について 西脇亜也・田村駿斗(宮崎大・農)
- C02 サロベツ湿原とその周辺に生息するエゾシカ雌個体の植生利用における日周行動と季節移動の特徴 富士田裕子(北大・FSC・植物園)・小林春毅(北海道オホーツク総合振興局)・早稲田宏一(EnVison 環境保全事務所)
- C03 エゾシカ採食圧による知床岬草原植生の消失と回復の過程 渡辺 修・丹羽真一・渡辺展之(さっぽろ自然調査館)・石川幸男(弘前大)・宮木雅美
- C04 アトラス山脈南西部のアルガン葉中ポリフェノールに関する要因の検討 川田清和(筑波大学)・Charradi Youssef (ハッサン II 世農獣医大学)・Mohamed Yessef (ハッサン II 世農獣医大学)・藤井義晴(東京農工大学)・磯田博子(筑波大学)
- C05 富山県五箇山菅沼合掌造り集落の茅場においてカタクリ群落を成立・維持させる植生管理の形態 井田秀行・新井千夏(信州大・教育)
- C06 口永良部島の森林における埋土種子の種組成 千綿菜生・川西基博(鹿児島大・教育)
- C07 北海道十勝地方豊北海岸における漂着木処理が海岸植生へ及ぼす影響(第 2 報) 持田 誠(浦幌町立博物館)
- C08 岡山市百間川におけるオニバスの成長特性と場占有戦略

波田善夫 (岡山県赤磐市)・森定 伸 (榊ウエスコ)
 C09 維管束植物和名チェックリストを R で利用するパッケージ wameicheckr 松村俊和 (甲南女子大学)

<ポスター発表>

- P01 中間温帯林の気候的位置づけの検証 比嘉基紀 (高知大・理工)
- P02 東アフリカ共同体における森林植生の種組成について 目黒伸一 (国際生態学センター)
- P03 伊豆諸島における自生植物の生息地としての法面に関する植生学的研究 小屋敷やよい (筑波大学・生物資源)・上條隆志 (筑波大学・生命環境)
- P04 田島ヶ原サクラソウ自生地の湿性草原における 5 年間の種組成変化 岡田 遥・荒木祐二 (埼玉大・教育)・辻原毬乃 (元埼玉大・教育)
- P05 低頻度大規模攪乱から 9 年目の仙台湾沿岸部における植生の変化 富田瑞樹 (東京情報大学)・菅野 洋 (東北緑化環境保全株式会社)・平吹喜彦 (東北学院大学)・原慶太郎 (東京情報大学)
- P06 東京都府中市における 1980 年代以前と 2000 年代以降の植物相の比較 吉川正人・武藤由依 (東京農工大・農)
- P07 湧水湿地におけるヘビノボラズの更新状況に及ぼす植生構造と光・水環境の影響 西尾健吾・伊西萌香 (岐阜大・地域)・肥後陸輝 (岐阜大・社会システム経営)
- P08 埼玉県におけるクジュウツリスゲの分布と現在および過去の植生との関係 鐵 慎太郎 (倉敷市立自然史博)・木山加奈子・須田大樹 (埼玉県立自然史博)・岩田豊太郎
- P09 Spatial variation of photosynthetic activities of a pioneer grass species *Miscanthus condensatus* on volcanically devastated sites by the 2000 year eruption in Miyake-jima Island 鄭 鵬遥 (筑波大学)・上條隆志 (筑波大学)・廣田 充 (筑波大学)・張 秀龍 (成都生物研究所)
- P10 洪水時における砂州内への種子定着について—一石狩川の現地測と水理模型実験から— 大石哲也 (寒地土木研究所)・岡本隆明 (京都大学)・平松裕基 (寒地土木研究所)
- P11 海鳥による種子分散の観点から見た, 小笠原諸島の海鳥巣に含まれる植物種子の種組成 水越かのん (筑波大・院・生物資源科学)・上條隆志 (筑波大・生命環境系)・川上和人 (森林総合研究所)
- P12 市街地緑地の液果量が鳥類群集に与える影響 折戸咲子・上條隆志 (筑波大学・生命環境系)・正木 隆 (森林総合研究所)
- P13 ハママツナ *Suaeda maritima* (L.) Dumort. 個体群内でみられる花期のばらつきと比高の関係 小松良介・澤田佳宏 (兵庫県立大学大学院緑環境景観マネジメント研究科)
- P14 山口県下関市で認められた特定外来生物 *Spartina*

- alterniflora* の生育状況 黒田有寿茂・中濱直之 (兵庫県立大学)・早坂大亮 (近畿大学)・玉置雅紀 (国立環境研究所)・花井隆晃 (日本スバルティナ防除ネットワーク)
- P15 栃木県におけるオオハンゴンソウの分布変遷 任 睿・西尾孝佳 (宇都宮大・雑草管理教育研究センター)
- P16 植生学会「東日本大震災プロジェクト フェーズ 2」活動報告 2020~2021 年 大淵香菜子 (株式会社佐久)・島田直明 (岩手県立大学)・江刺拓司 (宮城県東部地方振興事務所)
- P17 流行歌歌詞における「植生」の変遷 石井直浩 (横浜国立大学)

XI. 会員移動 (2021 年 5 月から 2021 年 11 月まで)

1. 新入会員 (*学生)

- *林 裕貴 東京農工大学農学部
- 福田達哉 東京都市大学理工学部自然科学科
- *石井直浩 横浜国立大学大学院環境情報学府
- *大草三起 東京農工大学農学部
- *匂坂光希 東京農工大学大学院農学研究科
- *小松良介 兵庫県立大学大学院緑環境景観マネジメント研究科
- *榎本優吾 常葉大学社会環境学部
- *任 睿 宇都宮大学
- *大庭峻輔 常葉大学環境防災研究科
- 渡辺 修 (株) さっぽろ自然調査館
- *立石和奏 京都大学大学院文学研究科地理学専修
- *水越かのん 筑波大学生命環境系
- *青山友輝 筑波大学院理工情報生命学術院生命地球科学研究群生物資源科学学位プログラム
- 小屋敷やよい
- 折戸咲子 筑波大学大学院
- *鄭 鵬遥 筑波大学・生命環境科学研究科・生物資源科学専攻
- *麦 笠素 筑波大学生命地球科学研究群
- *猪島悠太 筑波大学生命環境学群生物資源学類
- *岡田 遥 埼玉大学教育学研究科
- 公益財団法人岡山県環境保全事業団

2. 退会

大澤雅彦, 須股博信, 佐藤方博, 片岡博行, 内田 圭, 小水内正明, 清水克哉, 森田哲朗, 田中崇行, 大塚勇哉, 唐津勇人, 奈良侑樹

3. 宛先不明

戎谷 遵, 上赤菜都美, 伊藤菜美, 元廣はるな, 高橋健吾, 原田一輝

別掲 1. 植生学会誌投稿規定 (新旧対照表)

新	旧
<p style="text-align: center;">植生学会誌投稿規定</p> <p>1～2 (省略)</p> <p>3. 植生学会誌は以下の種類の原稿を掲載する。 ①～③ (省略) 〈削除〉</p> <p>④資料・事例報告 (Material and report): データそのものに公表の価値があると判断できる調査資料および事例報告。 〈削除〉</p> <p>解説, 意見, 書評等については情報誌「植生情報」への掲載を原則とする。ただし, 編集委員会において妥当と判断されたものについては植生学会誌に掲載できる。</p> <p>4～5 (省略)</p> <p>6. 原稿の採否および種別は編集委員会が決定する。受け付けられた原著論文, 短報, 総説, 資料・事例報告の原稿は, 担当編集委員のもとで匿名専門家による査読を受ける。その結果, 内容, 体裁等に問題があると編集委員会が判断した場合は, その旨を著者に伝えて修正を求める。受理できないと判断された原稿は, 理由を明記して著者に返送する。〈削除〉</p> <p>7. (省略) 〈削除〉</p> <p>8. (省略)</p> <p>9. 植生学会誌に掲載された原稿は, 科学技術情報発信・流通総合システム (J-STAGE) において公開する。</p> <p>10. (省略)</p> <p>付則 1. この規程は 2021 年 10 月 4 日より適用する (2021 年 10 月 3 日改定)。 付則 2. (省略)</p>	<p style="text-align: center;">植生学会誌投稿規定</p> <p>1～2 (省略)</p> <p>3. 植生学会誌は以下の種類の原稿を掲載する。 ①～③ (省略) ④解説・意見 (Comment and remark): 植生学のある特定分野における時事的問題についての解説や限定的な事項に関するミニレビュー。 ⑤資料・報告 (Material and report): データそのものに公表の価値があると判断できるものおよび植生学会員に有益と考えられる学術情報に関する報告記事。いずれも, 解析・考察を伴わないもの。 ⑥書評 (Book review): 書評は投稿を原則とし, 最低でも刷り上がり 1 ページ程度の分量とする。引用文献はつけた方が望ましいがなくても良い。 ただし, ④解説・意見, ⑤資料・報告, ⑥書評については情報誌「植生情報」への掲載を原則とする。当該原稿の植生学会誌への掲載は, 編集委員会において妥当と判断された場合に限る。</p> <p>4～5 (省略)</p> <p>6. 原稿の採否および種別は編集委員会が決定する。受け付けられた原著論文, 短報, 総説の原稿は, 担当編集委員のもとで匿名専門家による校閲を受ける。その結果, 内容, 体裁等に問題があると編集委員会が判断した場合は, その旨を著者に伝えて修正を求める。受理できないと判断された原稿は, 理由を明記して著者に返送する。解説・意見, 資料・報告, 書評は編集委員会が掲載の可否を判断し, 必要に応じて著者に修正を求める。</p> <p>7. (省略)</p> <p>8. 原稿は本文等と図表, 投稿原稿送付状を 1 つの PDF ファイルにまとめて電子メール (原則として 3MB 以内) で送付する。メールで投稿する際の件名およびファイル名は「SVS-○○○」(○○は投稿者のローマ字姓) とする。</p> <p>9. (省略)</p> <p>10. (省略)</p> <p>付則 1. この規程は 2019 年 10 月 6 日より適用する (2019 年 10 月 5 日改定)。 付則 2. (省略)</p>

別掲2. 植生学会誌執筆要領 (新旧対照表)

新	旧
<p style="text-align: center;">植生学会誌執筆要領</p> <p>1. 原著論文、総説は和文または英文とし、原稿は次の順序で記述する。なお、各項目間は1行あけること。 A. (前略) (14) Appendix (著者が希望する場合、執筆要領 23 項を参照のこと)。 B. (前略) (11) Appendix (著者が希望する場合、執筆要領 23 項を参照のこと)。</p> <p>2. 短報については、原則として上記 1. に準ずるが、摘要(または要約)はつけない。</p> <p>3. 資料・事例報告については、原則として上記 1. に準ずるが、Abstract, Key words, 摘要(または要約)はつけない。</p> <p>4. (前略) 著者と発表年が同一の文献は、年号の後にアルファベットを付して区別する。著者が3名以上で第一著者・発表年が同じ文献も同様に区別する。(後略)</p> <p>5. 引用文献は本文中に引用したものすべてを著者のアルファベット順に記載する。著者が8名以上の場合、最後の著者を除き、第7著者以降の名前を省略しても構わない。冊子体が刊行されない電子ジャーナルの文献は、書誌名・巻号の後に論文番号(またはページ数)と DOI を記載する。また、冊子刊行前に電子的に早期公開された文献(巻号、ページが確定していないもの)を引用する場合、発表年は(印刷中)または(in press)とし、doi を記載する。記述は下記の例および最新号の形式に準ずる。 (中略) Noriyuki, M., Kondo, H., Shitara, T., Yoshikawa, M. & Hoshino, Y. (in press). A new formal classification for Japanese forest vegetation based on traditional phytosociological concepts. <i>Applied Vegetation Science</i>, https://doi.org/10.1111/avsc.12611 沼田 真 1967. 植物的環境の解析と評価。「自然: 生態学的研究」(森下正明・吉良竜夫編), 163-187. 中央公論社, 東京。 (中略) Remmert, H. 1980. <i>Ecology: A textbook</i> (trans. Biederman-Thorson, M. A., 1980). Springer-Verlag, Berlin. Wagner, V., Večeřa, M., Jiménez-Alfaro, B., Pergl, J., Lenior, J., Svenning, J. C., ... Chytrý, M. 2021. Alien plant invasion hotspot and invasion debt in European woodlands. <i>Journal of Vegetation Science</i>, 32: e13014. https://doi.org/10.1111/jvs.13014</p> <p>6. (前略) 永続性の判断が困難な資料の引用については、編集委員会の指示に従うこと。データベース等は引用文献には記載せずに、本文中に下記の例に準じて記載する。</p>	<p style="text-align: center;">植生学会誌執筆要領</p> <p>1. 原著論文、短報、総説は和文または英文とし、原稿は次の順序で記述する。なお、各項目間は1行あけること。 A. (前略) (14) Appendix (著者が希望する場合、執筆要領 22 項を参照のこと)。 B. (前略) (11) Appendix (著者が希望する場合、執筆要領 22 項を参照のこと)。</p> <p>2. 解説・意見、資料・報告については、原則として上記 1. に準ずるが、和文原稿の場合は、Abstract, Key words, 摘要はなくてもよい。英文原稿の場合は、Abstract, Key words, 要約はなくてもよい。</p> <p>3. (前略) 著者と出版年が同一の文献は、年号の後にアルファベットを付して区別する。著者が3名以上で第一著者・出版年が同じ文献も同様に区別する。(後略)</p> <p>4. 引用文献は本文中に引用したものすべてを著者のアルファベット順に記載する。著者が8名以上の場合、最後の著者を除き、第7著者以降の名前を省略しても構わない。記述は下記の例および最新号の形式に準ずる。 (中略) Mucina, L., Bültmann, H., Dierßen, K., Theurillat, J.-P., Raus, T., Čarni, A., ... Tichý, L. 2016. Vegetation of Europe: hierarchical floristic classification system of vascular plant, bryophyte, lichen, and algal communities. <i>Applied Vegetation Science</i>, 19 (Suppl. 1): 3-264. 沼田 真 1967. 植物的環境の解析と評価。「自然: 生態学的研究」(森下正明・吉良竜夫編), 163-187. 中央公論社, 東京。 (中略) Remmert, H. 1980. <i>Ecology: A textbook</i> (trans. Biederman-Thorson, M. A., 1980). Springer-Verlag, Berlin.</p> <p>5. (前略) 永続性の判断が困難な資料の引用については、編集委員会の指示に従うこと。電子ジャーナルは引用文献に他の印刷物と同様の形式で記載する。データベース等は引用文献には記載せずに、本文中に下記の例に準じて記載する。</p>

新	旧
<p>7. (省略)</p> <p>8. (省略)</p> <p>9. (省略)</p> <p>10. (省略)</p> <p>11. (省略)</p> <p>12. (省略)</p> <p>13. 原著論文は刷り上がり 14 ページまで、短報、資料・事例報告は 6 ページまで、総説は 16 ページまでを無料とし、原著論文と総説以外は原則としてこのページ数を超えないものとする。なお、原稿約 2.5 ページが刷り上がり 1 ページに相当する。(後略)</p> <p>14. 投稿時における原稿量の基準は、表題および Abstract、本文等、図の説明、図表を含む総原稿枚数で、短報、資料・事例報告は 15 枚以内とする(ただし本要領 7, 8, 15, 17 項を満たすこと。A4 版用紙に収まらない図表はその実枚数とする)。(後略)</p> <p>15. 原稿では、図(写真も含む)、表等は 1 ページに 1 点ずつ刷り上がり相当の大きさで作製すること。1 ページに収まらない表は複数ページに分割すること。表は所定の形式(学会ホームページに掲載)にしたがって作製する。(後略)。</p> <p>16. 図、表、写真等のカラー印刷は所定の料金とし、著者の負担とする。料金については学会ホームページを参照すること。ただし、J-STAGE に登載する PDF ファイルのみカラー表示とする場合は無料とする。</p> <p>17. (省略)</p> <p>18. (省略)</p> <p>19. 原稿は本文等と図表を 1 つの PDF ファイル(原則として 3MB 以内)にまとめ、投稿原稿送付状(MS Word 形式)とともに電子メールで送付する。メールで投稿する際の件名および原稿ファイル名は「SVS=○○○○」(○○は投稿者のローマ字姓)とする。</p> <p>20. 最終原稿(MS Word 形式のファイル、それ以外のアプリケーションで作成した場合はテキストファイルも必要)および原図・写真等(高解像度のもの)は、原稿受理後に編集委員会の指示に従って送付すること。</p> <p>21. (省略)</p> <p>22. 別刷は著者の負担で作製する。別刷の必要部数(50 部単位)を投稿原稿送付状に明記すること。料金については学会ホームページを参照すること。</p> <p><削除></p> <p>23. (省略)</p> <p>24. (省略)</p> <p>付則 1. この規程は 2021 年 10 月 4 日より適用する(2021 年 10 月 3 日改定)。</p> <p>付則 2. (省略)</p>	<p>6. (省略)</p> <p>7. (省略)</p> <p>8. (省略)</p> <p>9. (省略)</p> <p>10. (省略)</p> <p>11. (省略)</p> <p>12. 原著論文は刷り上がり 14 ページまで、短報、資料・報告は 6 ページまで、総説は 16 ページまで、解説・意見は 8 ページまでを無料とし、原著論文と総説以外は原則としてこのページ数を超えないものとする。(後略)</p> <p>13. 投稿時における原稿量の基準は、表題および Abstract、本文等、図の説明、図表を含む総原稿枚数で、短報、資料・報告は 15 枚以内、解説・意見は 20 枚以内とする(ただし本要領 6, 7, 14, 16 項を満たすこと。A4 版用紙に収まらない図表はその実枚数とする)。(後略)</p> <p>14. 図(写真も含む)、表等は 1 枚ずつ別紙に刷り上がり相当の大きさで書き、著者の責任において作製すること。(後略)。</p> <p>15. 図、表、写真等のカラー印刷は所定の料金とし、著者の負担とする。料金については学会ホームページを参照すること。</p> <p>16. (省略)</p> <p>17. (省略)</p> <p>18. 最終原稿(作成したアプリケーション形式のファイルとテキストファイル)および原図・写真等(高解像度のもの)は、原稿受理後に編集委員会の指示に従って送付すること。</p> <p>19. (省略)</p> <p>20. 別刷は 1 論文につき 50 部を無料で受け取ることができる。これを超える別刷を希望する場合は著者の負担で作製する。別刷の必要部数(無料分を含む 50 部単位)を投稿原稿送付状に明記すること。</p> <p>21. 植生学会誌掲載論文は、科学技術振興機構の総合電子ジャーナルプラットフォーム(J-STAGE)上で公開される。</p> <p>22. (省略)</p> <p>23. (省略)</p> <p>付則 1. この規程は 2020 年 10 月 18 日より適用する(2020 年 10 月 17 日改定)。</p> <p>付則 2. (省略)</p>

別掲3. 植生学会 2020 年度一般会計収支決算 (単位: 円)

収入の部	予算	決算	差異	備考
前期繰り越し	2,950,798	2,950,798	0	
会費	2,822,000	2,834,000	12,000	一般 362, 学生 39, 団体 10, 賛助 1
バックナンバー売り上げ	20,000	3,500	-16,500	
雑収入	500,000	418,815	-81,185	
		(143,815)		著作権使用料など
		(275,000)		別刷・超過ページなど
利息	500	4	-496	
計	6,293,298	6,207,117	-86,181	
支出の部	予算	決算	差異	備考
植生学会誌刊行費	2,000,000	1,840,104	159,896	第 37 巻 1 号・2 号 (別刷印刷費を除く)
植生情報刊行費	400,000	430,978	-30,978	第 24 号 (第 25~27 号表紙イラスト謝礼金 31,510 円を含む)
				学会事務局・会計事務局経費を含む
学会事務局経費	900,000	445,833	454,167	
編集委員会経費	40,000	12,363	27,637	
企画委員会経費	400,000	0	400,000	
表彰委員会経費	50,000	74,367	-24,367	第 25 回大会がオンライン開催となり発生せず
大会補助費	300,000	0	300,000	第 37 巻 1 号別冊印刷費 52,250 円, 第 37 巻 2 号別冊印刷費 44,000 円
予備費	2,203,298	96,250	2,107,048	
計	6,293,298	2,899,895	3,393,403	
収支差額 (繰り越し)	0	3,307,222		

別掲4. 植生学会 2020 年度特別会計収支決算 (単位: 円)

収入の部	予算	決算	差異	備考
前期繰り越し	4,536,362	4,536,362	0	
利子	0	39	-39	18 年度の利息 15 円を含む
計	4,536,362	4,536,401	-39	
支出の部	予算	決算	差異	備考
国際学術発表助成事業	150,000	0	150,000	
国際植生学会派遣事業	300,000	0	300,000	
研究助成	150,000	150,000	0	研究助成: 瀬戸 150,000 円
植生情報データベース化	150,000	0	150,000	群集属性検討委員会で 2021 年に執行予定
書籍刊行	0	0	0	
事務局経費	0	550	-550	研究助成金振込料
そのほか (雑費)	30,000	0	30,000	
計	780,000	150,550	629,450	
収支差額 (繰り越し)	3,756,362	4,385,851	-629,489	

別掲 5. 植生学会 2021 年度一般会計収支予算 (単位: 円)

収入の部	2021 年度	2020 年度	差異	備考
前期繰り越し	3,307,222	2,950,798	356,424	
会費	2,762,000	2,822,000	- 60,000	一般 408, 学生 51, 団体 10, 賛助 1 (4 月 16 日現在)
バックナンバー売り上げ	20,000	20,000	0	
雑収入	500,000	500,000	0	
利息	500	500	0	
計	6,589,722	6,293,298	296,424	
支出の部	2021 年度	2020 年度	差異	備考
植生学会誌刊行費 1,350,000 円× 2 回	2,700,000	2,000,000	700,000	第 38 巻 1 号・2 号
植生情報刊行費 405,000 円× 1 回	405,000	400,000	5,000	第 25 号
学会事務局経費	600,000	900,000	- 300,000	
編集委員会経費	20,000	40,000	- 20,000	
企画委員会経費	400,000	400,000	0	
表彰委員会経費	65,000	50,000	15,000	
大会補助費	300,000	300,000	0	第 26 回大会
予備費	2,099,722	2,203,298	- 103,576	
計	6,589,722	6,293,298	296,424	

別掲 6. 植生学会 2021 年度特別会計収支予算 (単位: 円)

収入の部	2021 年	2020 年	差異	備考
前期繰り越し	4,385,851	4,536,362	- 150,511	
計	4,385,851	4,536,362	- 150,511	
支出の部	2020 年	2019 年	差異	備考
国際学術発表助成事業	150,000	150,000	0	
国際植生学会派遣事業	150,000	300,000	- 150,000	
研究助成	150,000	150,000	0	
植生情報データベース化	150,000	150,000	0	
書籍刊行	1,000,000	0	1,000,000	2020 年度分順延のため
事務局経費	10,000	0	10,000	振込手数料等
そのほか(雑費)	30,000	30,000	0	
計	1,640,000	780,000	860,000	
収支差額(繰り越し)	2,745,851	4,009,253	- 1,263,402	